

# な か ま

発行  
佐倉市立中央公民館  
な か ま 編 集 係

〒285-0025  
佐倉市鍋木町 198-3  
電話 (043) 485-1801

2 ページ	桶川宿の旅	小泉信子	身近な雑記 切ない将棋盤	富原敏光
3 ページ	面白一本	小沼恵理子	痛みについて	奈良雅広

## 魅せられて

松山 洋子

植物が好き。歩くのが好き。山野草の観察も散歩も、四年前の退職を機に始めた。

私が歩くのは圧倒的に田んぼや里山が多い。どんなに小さな草にも生まれたばかりの木にも、私達人間と同じように命が宿り、懸命に生きていくことが伝わってくる。私の体に組み込まれている田舎好き、山好き、草花好きのDNAが、ここへきて頭をもたげたのかも知れない。

特に好きなのは春の田んぼ。いち早く可憐な花を付けるオオイヌノフグリやヒメオドリコソウなどの野草が、土手のあちこちに広がる頃、田んぼでは土起こしが始まる。田んぼに命が蘇る瞬間である。ごろんとひっくり返された黒い土が平らにならされ、水がはられる。やがて田植えが始まる。春の心地よい風

早苗が揺れ、水面にさざ波が立つ。心安らく大好きな風景である。

印旛沼周辺の一面の田んぼも良し、白銀の南側に広がる高岡の畔田もよし。交通の便が悪くなかなか行かないのだが、西御門の田園風景はとりわけ絶景である。

四年前の五月、入会後初の山野草の観察会が西御門で行われた。バスは終点で下車。歩き始めて数分後、飛び込んできた田園風景に私は思わず息をのんだ。眼前の田んぼの向こうには、寝そべるようになだらかな山。その山裾に沿って大きな屋根がほぼ横一列に並んでいる。どのお宅にも立派な樹木があり、道なりに続いているものだから、まるで古木街道のよう。何もかも見事に調和した堂々とした風景に、しばし野草の観察を忘

れ立ちすくんだのである。さらに、その風景がそっくりそのまま田んぼに映し出され、足下まで広がっているではないか。五月晴れの澄み切った青空までをも取り込んで。

何度訪れても、そこには必ず何かの発見や感動がある。だから、山野草の観察も散歩もやめられない。

この秋のトピックスは将門周辺で見つけたスズメウリ。直径2cm足らずの丸くて小さな実。熟すと白くなることから、スズメの卵に見立てた命名らしい。佐倉では珍しいキカラスウリも発見。レモン大の黄色い実がゆらゆら揺れる姿を楽しみにしていたのだが、夏のある日、からみついていたりウメの枝と共に、赤ばつさり刈られてしまった。赤いカラスウリを加え、三種のウリの特徴を比較するには、絶好の観察ポイントだったのに、残念でならない。

厳しい冬でさえ、里山には魅力がいっぱい。何で歩かずにおられようか。

(編集委員)

## 桶川宿の旅

盛岡在住の旧友と、年に一度の再会の旅。埼玉県の宿場町に行ってみようということになり、ネットで検索。トッブに「桶川宿」が出てきました。観光協会にお願いすると、地図やパンフレットが届き、その中に「ボランティアガイドに案内してもらえますよ」という書き込みがあったので、さっそくお願いしました。

青いベストに白い帽子を目印に、車でボランティアガイドの森田さんにお会いして、三時間の予定を、何と五時間も熱心に楽しくガイドしていただきました。

日本橋から京都三条まで、中山道六九宿のうち、桶川宿は六番目の宿場町。江戸時代には三六軒の旅籠がありました。が、今は「武村旅館」が一軒のみ。昔の面影がそのまま残っていて、宿泊もできます。当地は紅花宿ともいわれ、

幕末には山形に次ぐ紅花の大産地でした。山形より暖かいので収穫時期が早く、染料原料としての質も良かったことから、米の二倍の高値で売れたこともあったという。稲荷神社の境内には、紅花商人二四人の名が刻まれた立派な石灯籠があり、当時の商人の繁栄ぶりがしのべられます。

今も残る島村家三階建土蔵は、壁に黒漆が塗られ、威風堂々といった趣がありました。飢饉のとき、お助け蔵として活用されたそうです。ガイドさんのお陰で蔵の中まで見せていただき、赤毛の異人さんのおひな様など珍しいものを拝見できました。

おみやげに紅花の種をもらい、家で蒔きました。時期遅れのせいか、咲いた花は未熟児のような小さなものでしたが、今では、旅の想い出のドライフラワーになっています。

(宮小路 小泉信子)

## 身边雑記

### 切ない将棋盤

定年の年齢になったので、予てから憧れていた志津将棋同好会に入会の手続に向かった。午前十時頃、公民館の二階の会場に着くと既に数名の男性が将棋大会の準備に忙しく働いている。私が自己紹介して入会の希望を告げると、会長らしい物柔らかな人が「何段ですか」と問う。私は恐る恐る「段も級もありません」と答えると、「それでは岡本さん、お相手して下さい」と頼む。私の隣の人が岡本さんらしい、小柄で品の良い方である。勝負は直ぐに付き、私が負けを告げると、先程の人が「岡本さんが一級だから二級で指して下さい」と小さく笑いながら言う。岡本幸男氏が素早く立ち上がり、「私が危機一髪の処まで追い込まれ運よく逆転勝ちでした」と庇うように言ってくれ

たので私も一級を許された。当日の志津将棋同好会の成績は臍気ながら覚えている。二勝三敗、その内の一勝は岡本さんとの対戦であった。同好会の縁で、岡本さんとの付き合いは急に輝きを増し我が家でも対局して、二人共、病み付くようになり、何とも得難い友人にまで進んだ。

或る冬の朝、岡本さんの誕生祝いに差し上げようと心に決めていた使い込んだ榎材五寸の将棋盤を風呂敷に包み届けた。玄関に岡本さんが出てきて、「あら、本当に呉れるの」と、僅かに困った顔をして、奥さん呼び、「富原さんからのプレゼント」と優しく叫び喜んでくれた。互いに心易く楽しい日々が、七、八年続いたが、或る日、岡本さんが急に癌で亡くなった。

暮れなずむ

日差し仄かに寂しかり

将棋の友の通夜にむかいぬ

(中志津 富原敏光)

## 面白い本

「何か面白い本ない？」  
「今、読んでおかなきゃいけない本ない？」二十歳になる我が子に、時々せつつかれる。外出先でも読める手軽な文庫本がお気に入りなのだ。

簡単なようで「面白い」というのは難しい。その人の好みによるからだ。究極色々読んで、自分のお気に入りの作家やジャンルを見つけるしかないだろう。私も、まず、人気が本から読んでみたりするのだが、これが当たりはずれがある。人気があるからといって自分にピッタリとくるとは限らない。大体が、ネット上の本の情報から面白そうな本をピックアップして、読んでみる。文章がスムーズに入ってくるかどうかによってお気に入りの作家か判断できる。ネット上の本屋さん自身の書いている書評に、最近注目している。読後感とかが、よ

くわかるからだ。読むからは幸せな気分になりたい。

あるテーマが気になつたらとことん追求してみるのもよい。私の場合は、図書館で県立の図書館の本を取り寄せてもらったり、ない場合は、ネットの古本屋に注文して貴重な本を手に入れたりした。他人はどうあれ、自分が納得いくまで追求して得る結果の醍醐味である。

読書は何も秋ばかりではない。興味のわきおこった時、読みたくなった時が旬であると思う。マイペースな本とおつきあいをどうぞ。

(西志津 小沼恵理子)



## 痛みについて

私は自慢ではないが、痛みは減法弱い。

歯痛は苦であるが、歯医者にかかると更に痛い。だから愚図愚図していてすぐ行かない。その結果、まともな歯は前歯だけとなった。

拷問があたり前の江戸時代、私が新撰組に捕まって仕置場に連れて行かれたら、様々な責め具をみせられただけで、同志の隠れ家など簡単に白状してしまっただろう。何せ奴等は、爪の間に竹串を刺すなど随分厭らしい事もしたと言う。ただ、その頃の日本人は余り弱音をはかなかつたようだ。先日片付けをしていたら三十年前のパンフレットが出て来て、面白くて読みふけてみると、我が佐倉順天堂についての記念講演が載っていた。幕末、すでに外科手術をしていた。それも麻酔無しで。当時の記録から、乳ガンの摘

出例が紹介されていた。患者の中年の農婦は執刀中も泣き叫ぶこともなく、小さくうめく程度で無事終了し、一刻程度休んだあと、湯漬けを食して帰って行ったそうである。それに続く先生の感想。華岡流の怪し気な麻酔に依らずとも、患者は気丈に耐えられる。変なものを使って眠らせる必要はない。

当時は分量を誤り、そのまま目を醒まさなかつたことも多々あつたようである。しかし、それにしてもである。我が身に刃が当てられ、肉を切り裂いて行くのを、正気のまま受け入れることが出来るであろうか。更に、肉を切り開き露出した大腿骨にノコギリが……。続いてシャリシヤリゴキゴキ、音と共に震動が伝わって来る。本当にそんな目に会い発狂もせず、死にもしなかつた日本人がいたのかい！

(中志津 奈良雅広)

## 11月の黒板

# 『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043 - 485 - 1801

〒285 - 0025 佐倉市錦木町198 - 3

### さくら道

子供の頃、我が家に「テレビジョン」が入ったのは、プロレスの街頭中継があった頃でまだ電気屋の店頭にも一台有るか無いかの時である。毎日夕方になると近所の子供や大人達が集まり、六畳間は連日満員で、乱れる画像を真剣に見入っていたものだ。部屋は熱気でムンムンし、臭くて、畳は汚れ、蚤はわくわく、で往生した記憶がある。

今では「オギャー」と生まれたそこには、カラーテレビが置かれている時代である。そして、二年後の地デジ化を控え、政府と放送界は普及率向上に総力戦を展開中だがまだ六〇%とか。おまけにピルの陰での難視や集合住宅でのアンテナの費用負担など、まだまだ課題はありそうだ。そう言う我が家は、未だに厚型のアナログのまま、我慢我慢の真つ只中にある。

（田中修司）

### あとがき

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

晩秋の候になりましたが、澄みきった空を眺めていると佐佐木信綱のこの句がふと頭に浮かんできます。

金田一春彦さんの『ことばの歳時記』によると「秋の暮れ」は、ずっと以前には「暮れていく秋」つまり晩秋のことでしたが、それがいつから

か混乱して「秋の夕暮れ」に変わってしまったそうです。

一方、漢語の「暮秋」は晩秋のことですが、これを訓で読むと「暮れの秋」になります。そこで「秋の暮れ」は秋の夕暮れで、「暮れの秋」は晩秋ということになります。

来月はもう師走、冬はすぐそこまできています。インフルエンザの流行が懸念される季節になりますが、今月号も佳作をお寄せ戴き充実した紙面になりました。

（金井義彰）